

二宮、三個人的才能の三つが擧げてある。一方「支那社會史」では私は門閥の力や民族の相違による階級性のあることを強く教へられた。門閥とか民族とかは明かに上の社會學の階級の定義に當てはまる。而もこの二種の階級は上の三つの服従手段だけでは解釋し切れない服従手段を持つて居る場合がある様な氣がする。この場合社會學は一步譲つてその概念を組立て直すべきだといふ氣がするのである。

これは私の思ふには社會史が無自覺に社會學に挑戦した一例なのだが、更に一步進めて意識的に社會學を、延いては一般人士の社會の諸觀念を更改する如き社會史が作られてはどうかと思ふのである。それには無論社會史を作る側でも社會學を一通りは知つて居る必要があることはいふまでもない。

尙この支那社會史を讀み了つて一寸不思議に感じたのは支那の家族制度に就て殆んど書かれて居ないことである。岡崎氏が一寸觸れて居られるだけである。集團としての社會の問題、即ち階級や地方自治團體の問題は全巻を通じて遺憾なく論せられて居るのに、社會の構成單位としての家や家族制度のことは社會史の問題にならないのであらうか。この事は大體執筆者四人全部に共通して居るだけに尙更私には不審に思はれたのである。(昭和十六年一月、白揚社發行、四六版三九一頁、價參圓)〔内藤戊申〕

## 長 安 の 春

石田幹之助著

これは著者がかつて雜誌・論叢に發表せられた論稿のうち、唐代の文化に關するものが集められた論文集であつて、收むる所は一、長安の春・二、「胡旋舞」小考・三、當壚の胡姬・四、西域の商胡重價を以て寶物を求むる話・五、再び胡人探寶譚に就いて・六、隋唐時代に於けるイラン文化の支那流入・七、長安盛夏小景の七篇である。本誌に載せられた「胡旋舞」小考をはじめとして、いづれも以前に發表せられたものばかりで、内容もよく知られ、價值も立派に認められてゐるものばかりだから、どれも加筆補訂が加へられてはあるとはいへ、今更こと新しく紹介する必要もないかと思はれるけれども、いま編輯者の命もあり、中には此の本ではじめて私の見たものもあり、さうでなくてもかやうに一冊の本になつたのを見ると自然新たな感興も加はり、敢へて蕪辭を列ねて紹介をする次第である。

「長安の春」は、もと杜邨生の筆名で「ドルメン」の創刊號(昭和七年)の巻頭を飾つてゐたものである。——この創刊號には、これについで故濱田先生の處女飛行の記や、連載せられた清野博士のものとか金關博士の翻譯の第一回分などがあつて、記憶に残つてゐる號である。内容は、題名の示す通り、春の長安の風物が述べられたものであつて、唐人の詩文を巧みに配し、美しい筆致で以て、花の長安の榮華の様があざやかに描き出されてゐる。

これの後半部の、春も園の頃の牡丹の觀賞について説いた條りは、その後すつかり書きかへられて「唐都長安に於ける牡丹の觀賞に就いて」といふ題で「市村博士古稀記念東洋史論叢」に載せられた。私はもともと漢詩には不感性で、並べられた四角な字の間に盛られた詩人の熱情に共感を示すことは至つて不得手なのであるが、この白樂天の「買花」にはじまり「牡丹芳」を以て結びとする論文を讀んだときには異常な感興を覺えて、それまで手にしたこともなかつた鈴木先生の白詩の註解本を披いてみたりしたのでつた。

次の「カ胡旋舞々小考」と「當壚の胡姬」とは、ともにソグド婦人を主題としたもので、前者はソグドの特技なるアクロバティックな舞踊「胡旋舞」についての考證であり、後者はソグド美人の長安の酒店で客席に侍してゐたものがあつて、これが當時の都人士や文人騷客連によろこばれてゐた様を述べたものである。向達氏の名著「唐代長安與西域文明」の成功にこの兩篇の寄與する所が如何に大であつたかは、同書を讀んだ人の誰しもが知るところであらう。前者はもと本誌十五卷三號（昭和五年）に載せられ、ついでその佛譯が「東洋文庫歐文紀要第六」にのせられたもの、後者は「佛教美術」第十五册（昭和四年）にのせられ、いま本書に收められたものはすつかり書きかへられてある。私がはじめてこの「當壚の胡姬」をよんだとき、「佛教美術」は考古學教室の備附になつてゐて、これを見ようと思つて行つたところが、折から教室では濱田先生をとりまいて例の座談の最中で、早速その仲間入

りをして本の方は忘れてしまひ、翌る日また出直して讀みに行つた憶ひ出がある。

これには、もと「長安汲古、一」といふ副題がつけられてあつた。本書に收められた昭和五年の「胡旋舞」、七年の「長安の春」、八年の「牡丹の觀賞」は、あるひはその二、三、四にあたるものと解すべきものであらうが、大變惹はつた話ながら、私は久しくその五、六、七……を期待してゐたのだつた。今かやうに一册の本にまとめられたのを見ると、その期待の實現からや、遠のいた様な感がないでもなく、果して然りとすれば些か物足りなさを禁じ得ない。

次の「西域の胡人、重價を以て寶物を求める話」は前三者と少々趣を異にし、或る人が寶物を寶物と知らずに持つてゐて、之を西域の商人に見せると驚いて法外の値で買つて行く」といふ説話を太平廣記その他の小説・隨筆のうちより十數例蒐集したもの。「再び胡人探寶譚に就いて」は右の補遺で、支那の雜誌「民間」にのせられた現在浙江省の諸地方で行はれてゐる類話が述べられてある。なほ之については、「史學」二〇ノ一誌上の本書の書評の内に竹田龍兒氏が類話を二、三補つてゐることを附記しておく。

「隋唐時代に於けるイラン文化の支那流入」は、宗教・藝術・衣食住の三方面からイラン文化の流入ぶりを論じた概説である。もと「世界文化史大系」の「隋唐の盛世」の卷に收められてあつたもので、後に書きかへられて「東洋思潮」第十八回の「支那文化と西方文化との交流」のうちの一部をなしてゐたもの、これに附

篇として後者のうちの一章「隋唐時代に於ける支那文物の西漸」が加へられ、なほ参考書目が附けられてある。

最後の「長安盛夏小景」は、はじめ東京日日新聞にのせられ、日本大學の「東華」に轉載せられたとのことで、氷柱の話とか涼棚とかメロンとか、都人士の夏の生活ぶりが談話體で述べられてある。

本書全體について特に述べねばならないことは、こみいつた考證は著者一流の流麗な行文のかけに隠されてゐて、外見は一向固苦しくないことで、一般讀者の讀みものとしても不適當ではない。このことは「日本古書通信」の近着號の「ハガキ回答」欄に『近頃興味深く讀んだもの』として本書の名を擧げてゐた専門外の人が二、三あることによつても證されるであらう。(昭和十六年四月二十二日創元社發行、菊規格版二二三頁、附圖二葉、二圓三〇錢)〔藤枝崑〕

### 獨逸に於ける猶太人問題の研究

菅原 憲 著

「故國を去つて二千年、流離放浪の歲月を重ねながら民族的特質を失はず傳統的矜持を棄てず今尙儼然たる猶太人の存在は世界史上の一異觀と云はねばならぬ」と著者はその序の冒頭に於て述べてゐられるが、寔に、先頃盟邦ドイツを追はれた夥しい猶太人が安住の地を求めて逃避行を續け、シベリアを經由して、或は敦賀に或は上海に不安な落魄の姿を現はしたのは我々の記憶に新なる

所であらう。然し亦一方では、現今の如く戦亂が文字通り全世界に擴大するにつれて、戰爭は金權猶太人の製造する所なり人類の敵、猶太人の謀略こそ討つべしとの喧々囂々たる叫も賑々耳にした事である。勿論我が國に於ても猶太人問題は識者の間で注目せられ、既に數多の書物も上梓を見たのであつたが、いづれも唯猶太人の謀略のみを衝くに急であつて本格的な研究の未だ見出だされないうらみがあつた事は否定出来ない。

猶太人は、云ふ迄もなく、歐洲各地に移住して後、他と没交渉に唯彼等だけで生活してゐたのではなかつた。彼等は歴史的存在として、ヨオロッパ文化の光復する所、各々特定の國家に屬し、その國家と、廣くはその國の文化との交渉に於て生活し續けて來た事を思はねばならない。従つて猶太人の理解に於て從來往々見られた如き時と國家を無視した猶太人一般は一個の抽象に陥るであらう。西洋史の權威にして本問題に多年研鑽を重ねられてゐる著者が猶太人一般ではなく「獨逸に於ける」猶太人問題を取り上げられた所以も推察し得ると共に眞に歴史的具體性を持つた多年の研究の成果を世に送られた著者の勞苦に對し感謝の意を表する次第である。

本書は第一章古代の希伯來人。第二章中世獨逸の猶太人。第三章中世末期から近世の初期まで。第四章近世の初期から獨逸統一まで。第五章第二帝政時代。第六章世界大戰及び其の以後。の六章より成り立つて居り、その内容の詳細なる紹介は爲し得ないが、第一章から第四章迄はどちらかと云へば「メンデルスゾー